

紺碧。

佐倉 吹雪

◆登場人物

男 女

もうひとりの男

老婆

医者

課長代理

チカ アキ ルミ ユキ テル トシ ニ ク

暗い舞台にハタハタと音がする。

何の音だろうか。

そのうち雲が途切れたのが、薄く月光が差し込む。

一面に、白い花がハタハタと風に吹かれている。(花は白い紙を折ったもの)

美しい夜。

花に誘われるよう黒いシルエットの人々が舞台に現れる。

花の美しさに心を奪われたのか。

立ち尽くす人々のシルエット。

うつすらと半鐘の音が短く断続的に聞こえてくる。

聞いているうちにそれは蝉の声に変貌してゆく。

やがてそれはすべてを飲み込むほどに盛大になっていく。
シルエットたちが、ひとり、またひとりと固まっていく。

まるで、命を持たない彫像のように。

月明かりと思えたそれが、昼間のものに変化する。
物語が始まる。

蝉の声がしきりにする。

その声はセンセー、センセーと叫んでいるように聞こえる。

センセー、センセー、センセー、センセー…。

実際、その声は彫像たちの口から漏れていた。

彫像たちが動き出す。

蝉の声の中から飛び出してきた男、蝉よりもさらに切羽詰まった声で叫ぶ。

男 せんせい!

「先生」と呼ばれた男が、くるりと振り向いて。

医者 ほどんど眠れない、んですね。

男 はい。

医者 食欲もない、と。

男 はい。

医者 何を食べても味がしない、わけですね。

男 はい。

医者、ぱたりとペンを置いて。

医者 少し休んだらどうですか？

男 …え。

医者 ストレスを甘く見てはいけませんよ。診断書、書いておきますから。

男 診断書ではなく、薬をもらえませんか。

医者 休養が一番の薬ですよ。

男 しかし…。

医者 お大事に。

医者、男に診断書（最初白い花として舞台上に存在していたもののひとつ）を渡して消える。

男、渡された診断書を見つめて。

男 こんなもん、持つてたらどうなる？ わざわざ不適格者の烙印押されに行くようなもんじゃないのか。

男、蝉を聴く。

そして蝉の声を呟く。

男せんせー、せんせー、せんせー、せんせー……不適格者……なのかな……夏休みの間に、なんとか……しないとなあ。

一心不乱に叫ぶ蟬の声の中に人の声が混じっていく。

「せんせー、せんせー、せんせー、せんせー……」

彫像としてそこにいた人々は、徐々に回想の声の主たちとなる。

みなそれぞれ白い花をひとつ手にして、ある者はこねくり回しながら、またある者は無造作につまみあげたまま等、すなわちそれぞれの向き合いで花をもてあそんでいる。

しかし口だけは別次元のように激しくまくしたてている。

全員先生！

全員 どういうつもりですか！

声一 うちの子はケガをしてるんですよ。

男 ですが最初に手を出したのは息子さんですし……。

声一 それなりの理由があつたんですね。理由がある上につきとばされてケガをしてるんですよ、うちの子は。

男 理由って……。

声一 消しゴムをね、貸してくれなかつたんですよ。

声2 どうしてうちが謝らなければならんんですね！

男 いや、でも相手はケガをしているわけですし。

声2 たいしたケガじゃないんでしよう。そもそも先に手を出したのはあちらさんですよ。うちに謝れってのはおかしな話でしよう。

男 しかしこですね……。

声2 なんですか？ 先生はうちの子を悪者扱いするんですか？ お気に入りの消しゴムを取られそうになつた上に殴られて、ちょっと払つたら、勝手によろけて机の角に頭をぶつけたっていうじゃありませんか。どこが悪いんです、うちの子の！

男 いや、あの……。

声3 うちの子は食べられないものが多いんで、給食を無理に食べさせないでいただけます？

男 しかしこですね、お子さんの発育を考えて……。

声3 大きなお世話を。

男 その大きなお世話をするのが教師の仕事でして……。

声3 しつこいわねえ。言いたいのはそれだけ?

男 いえ・・・給食費、払ってください。

声4 川本くん、今日も来てませんね。ホームルーム、代わりに見ますから迎えに行つてください。まさか、いじめなんてことは……。

声5 困るんですよ。いじめなんて。教育委員会に知られたら我々の点数が下がるんですよ。あなたは、臨時教員ですから、そんなことどうでもいいかもせんけどねえ。

男 いえ、決してそんなことは。

声6 クラスの平均点ちょっと低いですねえ・・・。教育委員会がうるさいんですよ。ほかの県と比べられちゃうから。もう少しなんとかなりませんか。

男 なんとかつていっても……居残り学習とか、手は打つてるんですが……。

声6 どうですか? 保護者にそれとなく塾を勧めてみては?

男 は?
塾?

声4 駅裏の学習塾、なかなかいいらしいですよ。スバルタで。

声5 私ら、スバルタなんてできませんからねえ。すうぐ問題になっちゃう。

声 消しゴム・・・。

声7 先生、部活の指導も頼みますよ。県大会近いんですから、バレー部。

男 でも・・・放課後は採用試験の勉強を・・・。

声5 臨時だからってね、ただ授業やつてればいいってわけにはいかないんですよ。

声 消しゴム・・・。

声7 生徒をなぐるな? 何言つてるんですか。

男 でも体罰は・・・。

声7 体罰? 人聞き悪いなあ。こいつらはバカだから部活でがんばるしかないんですよ。

声 消しゴム・・・。

声7 勝たなきや意味がないんですよ。

声 消しゴム・・・。

声7 それがこいつらのためなんです。

声4 先生のクラス、ちょっと落ち着きないんじやないですか。

声消しゴム・・・。

声6 しつかり生徒を監視してくださいよ。

声5 子供なんてものはね、監視しとかないと何をしてかすかわかりませんよ？

声6 監視して、管理するんです。

声消しゴム・・・。

男 授業中だぞ、席につきなさい。

声消しゴム……。

男なぜ宿題をやってこない。

声消しゴム…。

男どうして言うことを

声全員 消しゴム！・！・！

男、思わず手を振り上げたところで、ハツとして手を止める。

そんな男をじつと見つめる無数の目。

男 なんで……そんな目を……。

怯える男。

男 その子は振り上げた僕の手を蔑むような目で見ていた。ずっと僕の目を見ないまま、僕のすべてを蔑んでいた。

彫像たち、せんせー、せんせーと弦くように蝉を鳴く。

まるで輪唱のように響く声たち。

男は深く大きなため息をつく。

男 不適格者、なのかな。でもなあ、ほかに、今更…。

蝉の声しきり。

男 オレ、なんも持つてない…。

握っていた拳を開く、そこにはもう何もない。
立ち尽くす男。

後方から荷物を手にいっぱい抱えた女が走ってきて、男にぶつかる。

女 あ、ごめんなさい！

男 …。

女 あの、大丈夫ですか？
男 あ、ああ、びっくりして。

女 ほんと、すみません！
男 あ、いえ、こっちこそ、ばーっとして。大丈夫、大丈夫。

男はまるで自分自身に言い聞かせるかのように「大丈夫」を呟く。

女はそんな男を怪訝そうに見て。

女 そうですか？ ジャ、ごめんなさい、急いでるんで。

女、そのまま、駆け去る。その腕の中から一枚の紙が落ちる。
男、拾つて。

男 あ、あの、落としましたよ。

女、振り返って、その紙を認めると笑顔になつて。

女 差し上げます。それじゃ！

男 え？

女、そのまま走り去つてしまふ。

男 差し上げるつて……。

男、拾つた改めて眺める。それは、何かのチラシ。

男 「ほつとする島、穂戸之島？」へえ……こんな島、あつたんだ。船で40分……か。

波の音。

男 ほつとしたい……。

汽笛の音。

場面変わって、先ほどの女が姿を現し、熱弁をふるう。

女 現代社会に生きる現代人はみんな疲れ切つているんです！ あ、いや、そりやここでは、みんなマイペースで、のんきにやつてますけど……都会では違うんですよ！ ……え？ ……ちょっと、後藤さんそんなちやちや入れないでください。田舎生まれ、田舎育ちの人間が都會を語っちゃいけないんですか？ そんな法律あるんですか？ ……いや、わかつてますよ、首藤さん、熱くなつてませんつて。冷静です！ ……ちよ、衛藤さ

んまで、そんなこと言わないでください。私は真面目にやつてるんです！　ああ、もう！　と・に・か・く！　私の目に狂いはないんです。資料を見てください。さつき、配りました。あるじゃないですか、そこ。見てください！　私が作った観光PRチラシです。きっと当たります！　「ほつとする島」。この島の、この常軌を逸した、ド外れたのんきさは、もはや資源です！　そう！　りっぱな観光資源ーー！

課長代理、現れる。

課長代理 朝からずいぶんと熱弁をふるつてるじゃないか。

女 あ、課長代理。おはようございます。今の話聞いていただけました？

課長代理 ほつとする島？

女 はいっ。それです。私、観光課に配属されて、この島の担当になって、本当にやりがいを感じているんです。これまで、なんていうか、小学校から短大まで、なんとなく流して、割とすんなり、何事もなく生きてきたその分、一気にどーんと来た衝撃っていうか・・やる気の波的な。

課長代理 キミ。

女 はいっ。

課長代理 お茶は？

女え。

課長代理 一〇時過ぎてるじゃないか。早くお茶を淹れなさい。

女 は？

課長代理 それが、キミの仕事だろ。

女 や、私は…。

課長代理 早くしなさい。

女 でも…。

課長代理 加藤君、例の資料できるかな？

女 …。

女、仕方なく背を向ける。

女……ぜつたい、負けない。(小さく)

女、大きく息を吸い、くるりと振り向くと…。

女 お茶つ葉、切れてるんで、買ってきまーす。

女、走り去る。

場面変わつて、舞台は明るい陽射しの降り注ぐ美しき島。

波の音。

女、紙飛行機を折つてゐる。

連絡船が港に着いたようだ。

男、船を降りる。

女、飛行機を飛ばす。

女 いしあたまツ、バカ、加齢臭！

思いつく限りの悪口を言ひながら飛行機を折る。

あたりに広がる紙飛行機の群れ。

冒頭のシーンで花だと見えたそれは、紙飛行機の羽が風にはためいていたのかかもしれない。

そしてその飛行機のひとつが、島に着いたばかりの男のもとに。

男 あ。
女 あっ、すみません。

男、自分の持つてゐるチラシと、紙飛行機は同じものだと気づいて。

男 これ…。

女 あ、さっきの。え、来たんですか？
男 はい。

女 もしかして、そのチラシを見て？って、そんなわけないか。あつ、はい、そんなわけないですよね。あー、いや、そうだったらしいなー、って、すみません、願望っていうか、それ、私が作ったんで。
男 あ…そうなんですか。あ、はい、そうです。

女 え？

男 だから、あの、これを見て。

女 見て？

男 来ました。

女 えつ、そ、うなんですかー！？

男 ええ、まあ。

女 うつわ…。

女、無言で、全力の喜び。

男 あ、あの、大丈夫ですか？

女 喜んでます。

男 あ、そ、うなんですか。

女 はい！ 日頃感情を押し殺す癖がついてるもん。わかりにくくてすみませんッ！
男 あ、いえ…って、押し殺せてなかつた氣がするけど。

女 あの！

男 はい。

女 お願いがあります。

男 は？

女 一緒に来てください！

男え？ どこに？

女案内させてください。島を。

男え？ いや、悪いし…。

女気にしないでください。仕事みたいなもんだから。

男みたいなもん？？

女私、市の観光課で働いてて、今度この島の担当になつたんです。

男あ。

女だから案内します。いえ、させてください。

男でも…。

女その代り。

男え？

女あとで観光課と一緒に来てくれませんか？

男ええ？ なんで僕が…。

女このチラシの効果があつたってこと、証明したいんです。ひどいんですもん、みんな。ろくに見てもくれないの。そのくせ自分たちはなんの努力もしようとしてない。島は寂れる一方。なんのための観光課なんだって話ですよ。

男はあ…。

女もちろん、もちろん気に入つたらでいいんです。

男…。

女島が、ですよ、私じゃなくて。やだ、なんか。違いますよ？

男もちろんです…。

女よかつた。あんまり豆鉄砲な顔なさつてるから。

間。

男…ああ…ハトが？
女ええ、ハトが。

男 なんか、話の展開についていけなくて、すみません。

女 そんなに展開しましたっけ？

男 や、なんだろ…早く？ …頭回ってないのかな。

男の台詞を聞いて、女、俄然、自分にダメだしを始める。

女 ああーあ、ダメだめ。憩いの島なんだから。こーう、もつと一ゆづりー話さないとー、ねえー？ 私は島のホストなんだから。あ？ や、女
だから、ホステスか？

男 …。

女、男の視線に気づいて。

女 そういう意味じやありません！

男 はい。

女 そういう期待をもたれたら、困るんですけど。

男 持つてません。

女 よかつた。だったら、ついてきてください。ほつとする島。ご案内します！

男 あ…いえ…。

女 ほつとしたいと思いませんか？

男 …思います。

女 だったら！

男 でも…。

女、男におかまいなしに歩き始める。

女 何してるんですか。こつちこつち。

男 あ、ああ、はい。

男、女に気圧されてうつかりついていく。

女 あ、お腹すいてません？ お昼、まだですよね？ まだ十一時過ぎたところですもんね。ちょうどよかつた、おいしいマグロ丼食べさせるとこがあるんです。ふつーのおばちゃんがやつてる店なんですね。あ、知つてました？ この島、明治の昔からマグロ漁が盛んなんですよ。それで島では獲つてから一度も冷凍してない正真正銘の生のマグロが食べられるんです。心臓とか、胃袋とか、あごの肉なんかも美味しいんですよ、新鮮だから。まるごと全部食べられちゃうんです。

女、男を先導しながら捌ける。

男、女の鉄砲トークに引きずられながら捌ける。

やがて、また出てくる二人。

今度は男が先を歩いている。

女 すみません。なんか、私の分まで払わせちゃつて。そういうアレじゃなかつたんですよ、ほんとに。さつき、印刷所で、これの代金払つて。思つたより高かつたんですよ。すっからかんになつてたの、すっかり忘れちゃつて。

男 いいですよ。そんなに高くなかったし。

女 でしょー。あんなの東京で食べたら、すごいお金取られますよ。行つたことないんで、たぶんなんんですけど、たぶん間違いないです。

男 たしかに…旨かつた…気がする。

女 え？

男 あ、いや。

女 やー、でもほんつと焦つた。

男 見積もりとか取らないんですか？

女 ええつ？ 取りませんよー、そんな、昼ごはんにいちいち。えつ、取るんですか？

男 じゃなくて、チラシ。

女 あーー、……見積もりか。

男ええ、ふつうは。役所とかだったら、なおさら。

女自腹なんです。

男は?

女自腹で、私が作ったの。

男自腹で…?

男、改めてチラシを眺める。

男道理で…（クオリティが低い）。

女え?

男あ、いや。でも、身銭きってまで、なんで、そこまで…。

女実物見せたら「おおっ」ってなるかなって、思つたんですよね。お役所、ほら、頭固いから。こう、網膜に直接訴えかけたほうが。こう、がつーんと。

男それを言うなら視覚…。

女まあ、結局固すぎてチラシでもダメだったんですけど。

男ああ。（納得）

女でも、こうしてほら、実際お客様が釣れたってことになれば。

男釣れた…。

女あ、いや、連れてきたってことになれば、ほら、なんていうんですか。説得力？　湧くと思いません？

男説得力が、湧く…。

女あ、あ、ごめんなさい、ちょっと、電話。

男どうぞ。

女、ポケットで唸っていた携帯電話を取り出し、耳に当てる。

女はいはい…あっ！…すみません。ええ、勤務時間だってのはわかつてます。…えっと、あの、お茶っぱが売り切れてですね、どうしよう

かなーと…。はい、（腕時計を見て）20分、過ぎてますね。音、消してたもんで。あ、でもですね、収穫が…お茶の葉じゃないですよ。（電話の相手に怒鳴られたのか、肩をすくめる）すぐ戻ります。

女、電話を切ると大きく息をつき、男を振り向く。

男 どうぞ。

女 はい？

男 ひとりで大丈夫ですから。どうぞ、戻つてください。

女 すみません…。今日、会議入つてたのうつかりしてて。ちょっと行つてきます。

男 はい。

女 さくっと終わらせて、戻りますから。

男 いえ、もう。

女 手ぶらで帰るわけにはいかないんです！

男 ええ？

女 あ、いえ、一飯の恩義もありますし。

男 いつばん？

女 ひと飯。さつきの。

男 ああ…。いいですよ。

女 いえ、そういう訳には。あー、これ、私の番号です。

女、紙飛行機の隅に自分の携帯番号を書いて男に差し出す。

男 あの。

女 会議終わったら、電話ください。じゃ、あとで！

女、走り去る。

男 … 会議はそつちでしょ。ていうか。携帯持つてないし。

男、渡された紙をおみくじのように植え込みに括り付ける。
大きく伸びをする。

男 ああ…ほつとした…。

男、あたりを見回す。

男 静かだ…。急に別世界だなあ。

時々、タボと呼ばれる籠を背負ったおばあさんや、リヤカーを引いたおじいさんなどが、先の角を横切つたりしている。

男 猫、多いなあ…なに？ さっきから俺の顔じつと見て。ついて来いつて言つてんのか？ いやいやいや、ついて行かないよ。……しつゝいな。

間。

猫はじつと男を待つているようだ。

男 …いや、それも悪くない。猫はしゃべらないしな。お伽話ならこういう場合、どこか別の世界に連れて行つてくれるもんだ。さて、キミは僕をどこへ連れて行つてくれるんだい？

男、猫に従つてのんびりと歩く。

男の心の声 それは、まるで迷路だった。山肌に拓かれた小さな村は、小道が縦横に通つていて。あたかも、かつてあちこちの行楽地にまるで無作為に作られ、一世を風靡しながら、あつという間に忘れ去られた、あの巨大迷路のように。自分が先ほど曲がった角はどれだったか。眩

量のような感覚。せんせー、せんせーと泣き叫ぶ蝉。しかしそれさえがまるで静寂。蝉の声がかえってぴんとした静けさを感じさせる。止まつた時間のような、止まつた風景の中で来し方行く末を見失う。そう思うとき、なぜだろう、それは抑えがたい快感だった。あれ?

男、ふいに立ち止まる。

男 あれ? どつか行っちゃった。……、どこだろう。

立ち尽くす男。道案内の猫を失つて、まるでひとりでは歩けない者のように。

男 僕……迷っちゃった。

男が見失ったのは目の前の道だけだろうか。

思わず、あたりを見回すとそこには海を臨む墓地があつた。

男 ……お墓?

海に向かって立つ墓たち。

男 すごい。お墓がみんな海を眺めてる。

墓と並んで景色を見る。

男 ……絶景だ。

ふいに墓の間から老婆が現れる。

老婆 遅かったのう。

男、ぎょつとする。

男 うわ、びっくりした…。

老婆 ようやつと来てくれた。

男 えつと…。

老婆 遅かったのう。

男 僕に、言つてます？（後ろを振り返つたりしながら）

老婆 さ、行こう。

男 行くつて？

老婆 みんなが待つとるぞ。

男 みんな…？

老婆 ずっとずっと…あの日のままで。

男 いや、僕は…。

老婆 さあ。

男 あの、それは僕ではありません。僕は…違うんです。

老婆、男の目をじっとみている。

男 すみません…。

と、そこへもう一人別の男が現れる。

もうひとりの男 あのー、すんません。

男 今度は誰…。

もうひとりの男 ちょっと聞きたいんだけど…。

もうひとりの男、男と同じチラシを手にしている。

男 あ。

もうひとりの男 おつ、同じだー。

男 ですね。釣られちゃったんだ…。

もうひとりの男 はい?

男 あ、いえ、そのチラシ…。

もうひとりの男 あ、これ? 拾つたんだよ。島に着いてさ、港に降り立つじゃない? なんかやたらゴミが多いなあー、って思つて拾つたらこれだつたの。あんたがやつたの?

男 ちがいます、ちがいます。

もうひとりの男 あー、じゃあ、あんたも拾つたんだ。

男 ええど…まあ、はい。

もうひとりの男 マグロをね、食べに来たんだけどさあ。

男 マグロ?

もうひとりの男 ここ、マグロがすごいって、聞いて、てか、見て? ブログで。んで、船に揺られて、わざわざ。んでさあ、あれよ、船酔い? もうマグロどころじやないじやん? で、まあ、少し散歩でもして、塩梅よくしてから挑もうと思ったわけさ。

男 はあ…。

もうひとりの男 そしたら、そこいらじゅうに落ちてるじゃない、これ。ほつと/orする島? 見てやろうじゃないのってことになつて。

男 ことになつて?

もうひとりの男 自分の中で。

男 ああ、はい。

もうひとりの男 でね、これ、どこに行けばいいわけ?

もうひとりの男、ビラを差し出す。

男 わ、わからないですね…。

もうひとりの男 あ、おたくも？ 暗号的ものなのかな。

男 暗号で。

もうひとりの男 この中になんかヒントが隠されていて、それを解かないとたゞり着けない観光スポット、みたいな。

男 まさか。

もうひとりの男 だって、意味ないでしょ。何の情報もない観光チラシ。（チラシに見入る）

男 暗号化されたチラシも意味ないと思う。（ボソリと）

ふたりの男、それぞれ手にしたチラシに見入っている。

老婆 話はすんだか？ 行くぞ。

もうひとりの男 え、誰？ あんたの（知り合い）？

男 え？ いや、違いますよ、僕は。あなたじゃないんですか？

もうひとりの男 え、そう？ 行くつて、どこへ連れてってくれるんすか？

老婆 みんなが探している場所じや。

男 みんなが探している？

老婆 みんなが待つている場所。

もうひとりの男 探していく、待つている場所？ …おっ、さてはミステリーツアーだな。なるほど。このおばあちゃんも仕込みなんだな？

あ！ 港にチラシばらまいてたのも…。俄然面白くなってきたじゃないか、なあ、キミ。

男 でも、お仕事の途中じやあ…。

もうひとりの男 だから、これが仕事なんだよ。

男 いや…お墓、お掃除されてるんですね？

もうひとりの男 アイテムだよ、アイテム。

男 あ、ぼく手伝いましょうか。（煩わしい男から逃れるために…）

もうひとりの男 おいおい。

老婆 …どうせ空っぽじゃ。

男 からっぽ?

老婆 この墓はな、空っぽなんじや。

男 空っぽ…なんですか?

もうひとりの男 お、新たなるヒントだな?

老婆 それでもな、こうやつて手入れせんことにはな。

男 はあ。

老婆 気が収まらんけん。

男 はい。

もうひとりの男 わかる、わかるなあ。

男 わかるんですか?

もうひとりの男 年寄りつづーのはな、共感が大事なよ。じゃあ、おばあちゃん、行こつか。

男、もうひとりの男と老婆が去るのを見送るうとする。
しかし、老婆が振り返り、男をじっと見るので…。

もうひとりの男 キミい…。

男 …はい。

観念してついて行く。

場面変わって、役場。

女 遅くなっていますみません!

声 おお、待つとつたぞ。

女 ほんとですか!

声 これ、20部な。

女 コピーですか……。

声 ああ、あと……。

女 はい！

声 お茶……あ、いや、コーヒー、持つて来て。人数分。

女 ……はい。あの……。

声 急いでるんだ。あー、まず、コピーな。

女 はい。そうだ、チラシ、さつきのチラシ……。資料に入れて見てもらえば……。

声 おい、へんなもの資料に混ぜるなよ。

女 変なものって……。

チラシがゴミ箱に突っ込んであるのを見つける女。

女 私のチラシ……。ひどい。

ゴミ箱からチラシを回収する女。

その背中に向かって。

声 夢語るのは学生時代だけにしどけよ、お嬢ちゃん。
女 ……夢……なんですか……。

声 は？

女 夢なんですか？ この島の未来……。

声 はあ？ おい、お茶、まだか？

女 ……すまません。吐き気がするんで。早退します！

走り去る女。

声 おおい！

場面変わって。

男・もうひとりの男・老婆がやつて来る。

男 なんかいい加減だなあ‥‥。

もうひとりの男 頭が固いんだよ、キミは。肩の力抜かなきや。疲れちゃうだろ。

男 う‥‥。

もうひとりの男 人生、面白がったもん勝ちだろ？ そう思わない、キミ？

と、そこへ先ほどの女が戻ってくる。

女 ああ、やつと見つけた！

男 あ。

女 ひどいじゃないですか。

もうひとりの男 え、何、ツレ？

男 違います、違います。

女 これ！

女、紙切れを男の顔の前に突き出す。

それは、女が自分の電話番号を書き付けたメモだ。

男 あ‥‥。

女 おみくじじゃないんですよ。あんなとこに括り付けて。

もうひとりの男 なんだかおだやかじゃないなあ。

男 ご、誤解です。(もうひとりの男に)

女 どこが？ どこをどう誤解してるっていうんです？ これ括り付けたのあなたですね。

男 …すみません。

女 これ、おみくじに見えます？

もうひとりの男 見えないなあ。

女 あんた、何？

もうひとりの男 あなたの味方ですよ。

女 ええ？

老婆 あんた間違つとるよ。

女 え。

もうひとりの男 お、出たな敵。

男 あなた、何言つてるんですか。

もうひとりの男 味方がいて、敵がいる。じごく当然。

女 私のどこが間違つてるんですか？

老婆 おみくじ。

女 え？

老婆 おみくじは持ち帰るもんじゃ。

女 ああ、おみくじ。え。でも、みんな括り付けてません？

もうひとりの男 確かに。お正月なんか、神社の木はおみくじだらけになつてゐる。

老婆 みんな、間違つとるんじや。厄落としのために括り付けるのは、悪いおみくじだけ。

女 悪いおみくじ…。

女、男を恨めしそうに見る。

男 あ、いや、決してそういう…。

女 見かけによらず、失礼なんですね。

男 面目ない。

もうひとりの男 ふつ。

男 何笑ってるんですか。

もうひとりの男 許してやってよ。無知ゆえの過ちだ。（女に）
男 あなたも知りませんでしたよね。

もうひとりの男 キミ、細かいなあ。

男 あなたが大雑把すぎるんでしょう。

もうひとりの男 じゃ、そろそろ行こうか？（女に）

女 行くつてどこへ？

もうひとりの男 彼女が案内してくれるって。

女 彼女って……のおばあさん？

もうひとりの男 彼がさあ、ナンパしたみたい。

男 は？

女 どういうことですか？ 私が案内するって……。

もうひとりの男 そうだったの？

男 ええ……まあ……かな？

女 ひどい。

もうひとりの男 たしかにひどいな。

男 ちよつと！

もうひとりの男 まあまあ。しかしこれにはちょっととした理由があるわけよ。

女 なんですか？

もうひとりの男 諸悪の根源はこれさ。

もうひとりの男、チラシをちらりと出して。

男 あ。
女 あっ、それ！

もうひとりの男 なんか観光PRのために作ったチラシっぽいけど。

女ええ。

もうひとりの男 キミも知つてんの？

女ええ、そりや。で、どうですか、それ？

もうひとりの男 感想求めちゃう？

女ぜひ。

もうひとりの男 うーん。そ、うだな。センスが悪いのは、おいといても……。

女センスが悪い？

もうひとりの男 中身がない。

女中身がない……。

もうひとりの男 ただいい島だってばかりで何がどういいのか。実際この島のどこへ行き何を見るべきなのか、なんの情報もない。

男たしかに。

女それはもう、この島まるごと……。

もうひとりの男 ミステリーツアーのチラシみたいなんだけどね。

女ミステリーツアー？？

もうひとりの男 そういうものほど、センスが必要なんだ。

女センス、そうですか？ まあ、好みの問題も……。

もうひとりの男 このキャッチコピー。

女「ほっとする島」！ それだけは自信あ……。

もうひとりの男 何だ、このネーミングは。

女あー、ご存知ないんですね。「穂戸之島」って言つんですよ、この島。ほとのしま・ほつとのしま・ほつとするしま。

もうひとりの男 だじやれ……サイテーだ。

女さいい……。

男もうそれくらいに……。

もうひとりの男 もう僕は怒りさえ覚えるね。このチラシに。
女怒り…？

もうほんと泣きそうな女。

もうひとりの男 だつてそう思わないか、キミ。

男 もう、いいでしょ。そのくらいで。

もうひとりの男 ああ、ごめん。つい熱くなっちゃった。こう見えても俺、芸術家の端くれなんぞ、どうしても看過できなくてね。

男 芸術家……道理で……。

もうひとりの男 道理で？

男 あ、いや……自由な感じが。

もうひとりの男 何かに縛られてちゃ、芸術はできないよ、キミ。

男 はあ。

女 芸術家、なんですか。

もうひとりの男 まあね。だからどうしても僕は、美しいか、美しくないかで、ものごとを判断してしまったんだ。その点、この島は美しい。心洗われるねー、このどこまでも青い海。

もうひとりの男、満足げに海を眺めている。

女 (男に)有名な人なんですか？

男 なんで僕に？

女 有名な人ならチャンスですよね。

男 何が？

女 売り込まなきや……。

思わず目が合う男と女。

女 やだな、島ですよ。

男 わかつてます。しかしあなたメグませんね。
女 慣れますから。打たれるの。強いんです。
男 すごい……ですね。

女 ほめています?
男 ……もちろん。

もうひとりの男 そしてキミも、見ようによつては……ん? ちょっと何よ、二人でなんかこそそしちやつて。妬けちゃうなあ。
男 あなた、何言つてんですか。

老婆が振り返つてこちらを見ている。

もうひとりの男 キミ、年寄りを待たせちゃいけないよ。

男 なに人のせいにしてんすか。

もうひとりの男 行くぞ。

女 ほら、行きますよ。

男 なんで。

女 まずは親しくならなきや。

男 僕は……。

女 ホラ、早く早く。

男 なんか、変なことになつてきたな……。

蝉がしきりに鳴いている。

男 僕を先導するものが猫からおばあさんに代わつた。もしかしたらさつきの猫が人間の姿を借りてゐるんじやないか。おばあさんの猫背を見てゐるともはやそうとしか思えなくなつてくる。それにしてもさつきから耳鳴りがひどい。蝉の声なのか耳鳴りなのか、うまく区別がつかないけれど。もしかしたら、饒舌な二人の道連れのためかもしれない、この耳鳴りは……。そんなことを思いながら蝉のような耳鳴りを聞いているとそのうちに、耳が塞がつてきた。中耳炎を患つた時のように。あるいはプールのあと耳に水がたまつてしまつた時のように。気持ちが

悪い、というよりはひどく不安にさせるこの感覚。そう、まるで世間から…外界から遮断されるような孤独な感じ。そうだ、人間は誰しもひとりなのだ。今、この瞬間も。ひどい眩暈が僕を襲う…。

もうひとりの男 おもしろい島だなー。お、また井戸。

女 ほんとだ。

もうひとりの男 やつから井戸、多いよね。

女 ですね。

もうひとりの男 やつきのなんか祠みたいにしてあつたし、ここのは蓋に鍵までついてる。不思議だなあ。

女子供なんかが間違つて落ちたら困るからじゃないですか。

老婆 川もない小さな島じやけ、水は貴重なんじや。井戸も神さんのように大事に大事にしたもんじや。

女 …へえ。

もうひとりの男 面白い、実に面白い。

鐘の音がどこからか。

しきりに鳴いていた蝉が途切れる。

もうひとりの男 ん？ ん？

男 あれ…。何ですか、今の。

女え？

男 鐘、鳴つてましたよね。

もうひとりの男 鳴つてたなあ。なんなの？

男 なにかの合図ですか？

女 …。

男 あの。

女 …すみません。

男え…。

女 無責任ですよね。

男 何が？

女 あんだけこの島推しといて、初めての質問にも答えられない。

男 あ…知らなかつたんです…ね。

女 すみません。

男 いや、別に…。

女 無責任なんです、私。偉そうにあなたに案内するなんて言つたけど、ほんとはこの島のこと何もわかつてないんです。

男 何もそこまで…。

女 どうせ私なんか、仕事だっていつまでもお茶汲みばかりだし。島のことだって鐘だつて、井戸だつて知らないし。私の居場所なんて、どこにもないんです。

男 …なんか極端だなあ…。

もうひとりの男 あゝあ、泣かせちゃつた。

女 泣いてませんッ。

もうひとりの男 そりや残念。

男 あなたさつきからそうやって混ぜつ返すようなどばかり…。

もうひとりの男 ええ？ 僕？ 僕が悪いの？

男 そんなふうには…。

もうひとりの男 よくないなあ。責任転嫁は。

男 ちょっと、待つてください。

女 ちょっと待つて。

男 え？

女 もめてる場合じゃないわよ。

男 や、そもそもあなたが…。

女 おばあさんは？

男 え？

女 おばあさんがいない。

もうひとりの男 あれ、ほんとだ、どこいった？

あたりを見渡し探す3人。

男 いませんね。

もうひとりの男 しようがない、じゃあキミ案内…。

女 手分けして探しましょう！

男 え。…俺たちが？

もうひとりの男 そうだ、探そう。

男 あなたさつき違うこと言いかけてましたよね！

もうひとりの男 え、あなた探さないつもりですか？

男 はい？

女 探さないと。

男 だからなんで…。

女 ほつとけないでしょ。

もうひとりの男 もちろんだ。ほつとけない。

男 なんでそうなるんですか。

女 相手はぼけてんのよ。公務員的にまずいわよ、見てみ見ぬフリは。

男 え、ぼけてるの？

もうひとりの男 そうだ、からっぽの墓掃除なんかしてたんだ。ぼけてるだろう。

男 あなた、率先してついていこうとしてたじやないです。

女 非常事態には常に最悪の事態を想定すべきです。

男 非常事態なんですか？

もうひとりの男 たたしい。ひじょうにたたしい。

男 なんなんですか、あなた。

女 私、こっちのほう見てきます。

もうひとりの男 じゃあ、僕、あっち見てきましょ。

女 あなたは、この中、探してみてください。

男え、こ、う、て、…。

女 頼みましたよ！

二人捌ける。

女が指差した先には小学校があった。

男 ここは…学校…？ がつこう…。

男、つばをぐくりと飲み下して、その学校に足を踏み入れる。
場面は校舎の中へと移る。

誰もいない教室に蝉の声が響く。

男、教室に入つて。

男 この教室で最後か…いるわけないよな、こんな所に…。

誰もない教室を見渡して。

男 夏休みの教室ほどノスタルジーを感じさせる場所はないな。…あ、俺、立派な不法侵入か？

蝉の声は遠くなつていて。

男、大きく息を吸うと、見えない生徒に向かつて話かける。

男 おはよう。みんな、元気だったか。全員無事に揃つて何よりだ。しかし、いつまでも夏休み気分を引きずつていってはいかんぞ。今日から2学期だ。しつかり気をひきしめて、心新たに頑張ろう。……心新たにがんばろう。……まだ鳴いてやがる。(蝉が)がんばるなあ…。

男、座り込んでしまう。

やがて自らも小さく「せんせー」と叫んでしまう。

男 せんせー、せんせー、せんせー……せんせー……。

男、耳を塞ぐ。

ふと目線の先に一冊の本を見つける。

無意識のうちに、あるいは導かれるようにその本に手を伸ばす。

男、本を手にとる。

と同時に、半鐘の音、「せんせー」という声が混ざっていく。

男
え。

蝉の声ひときわ。

蝉の声の中に「せんせー」「せんせー」と子供の声が混ざっていく。

男
え……？ 空耳？

空耳ではなかつた。

子供たちが次々に姿を表す。

声たち せんせー！ せんせー！ せんせー！ せんせー！

男
え。

教室中にあるふれる子供たち。
教室の景色も先ほどまでと変わっているようだ。

黒板には「7月25日水曜日」の文字。

どの子もみすぼらしいなりをしているが、希望に満ちた眸をもつ小学生だ。
子供たちは口々に男に朝の挨拶をする。

男え？え？？なに。

チカ先生、おはよーござります。

ユキおはよう、先生。

男え、おはよう？

テル先生、おはよー。

男あ、今から何かあるのかな？ここ。

テル何かつて？

男学校行事かなにか…早く出ないとヤバイな。ごめんね。

男、教室から出て行こうとする。

チカ先生。

男え。

チカ私たち、先生がいらっしゃるのをずっと待ってました。

男え。

子ら待つてました。

アキいつまで待っても授業が始まらなくて。

クニすごく困つきました。

ルミせんせー。

ユキ先生！

アキお願いします！

男ごめん、僕は違うんだ。

トシ違う？

ユキ 違うつて？

男 ほら、違うだろ？

子供たち、しきりに首をかしげている。

男君たちの先生じゃない。

チカでも、私たちずっと待つてたんですね。

元禄すとすと徳とた

升力先生を待つてたんですね

先生が一千九百〇四年に作成した

アキラかうて違うの?

男 業はこここの教師じゃ

男 僕はこここの教師じゃないし。それに、第一僕は正式な先生じゃないんだ。それももうやめようかどうしようか悩んで……何いつてんだ、俺。ユキせんせい、先生をやめちゃうの？ 先生も、行っちゃうの？

男え……行くつて……？

卷之三

子ら先生！

男なんで。

チカ朝礼がなくなつて。

ルミ 教室に戻って

主と待つのは

アーティスト名

トシ 一年生は泣き出すし。

チカ ほんとに大変で。

男 わかつた、わかつたから、順番に話を聞くから。

子ら はあい。

男 まず、キミたちはどうして学校へ来たの？

クニ 先生、何言つとんの。子供は学校へ来るもんじゃ。

男 確かにそうだね。でも、今は夏休みじゃないの？

テル 夏休みは、なくなつた。

男 え、どうして。

クニ だつて、今、お国は大変なときやろう？

トシ 僕らだけ休んだり遊んだりしたらいけんつて。

男 お国が大変…。ずいぶん古めかしい言い回しだな。まあ、確かに、不景気だし、外交問題もアレだし…。でもだからって夏休みがないってのは…。あれか、夏期講習みたいなもんか？ 最近の小学生は大変だな。こんな田舎の島にまで中学お受験の波が…？ この子たちの親も…怪物…？

思わず身震いする男。

クニ 先生、どうしたん？

テル 先生、大丈夫か？

アキ 先生？

男 あ、ああ。ごめん。

子供たちの顔をまじまじと見てしまう男。

ルミ せんせ、具合悪いん？

ユキ 大丈夫、先生？

男 …大丈夫だよ。ありがとう。

ルミ・ユキ えへへ。

ユキ 先生、私たちちゃんと信号ができるようになったよ。

男 信号?

ルミ 旗を持ってくる。

ルミ 見て見て先生。

男 これ、何に使うの?

クニ 先生、知らんの?

トシ ようし、先生に見せちゃうぜ。

子ら おう!

子供たち、手に手に紅白の旗を持ち、手旗信号を披露する。

男 すごいな、みんな。今のは? 運動会の練習かな?

トシ 運動会? 何言つとるん?

クニ 軍事教練じや。

ルミ 軍事教練!

男 軍事教練??

チカ 先生、授業はじめようよ。

男 授業??

ルミ ちゃんと、教科書持ってきたよ。

ユキ 私も、ほら!

男 あ、ええと……君たちの担任の先生は? 今日はいないのかな?

テル うん。いない。

トシ ずっとといないよ。

男 ずっと…ひょっとして。精神を病んで…増えてるもんな、教師の心の病…。そーや、何も俺だけじゃない。

アキ 先生、何ぶつぶつ言つてんの？

ルミ 先生？

クニ 先生？

子供たち、口々に「先生」と呼びかける。

まっすぐな眸が男を貫く。

男子供たちの瞳がまっすぐ僕に向いている。こんな感覚、今まであつただろ？…あつたのかかもしれない。だけど…思いだせない…。
チカ 先生？

男 あ、ごめん。何でもないよ。

チカ 先生、授業始めよう。

男 授業、何の授業かな。

チカ 国語。

ルミ こくごー。

ユキ ユキ、国語すきー。

男 そうか、ユキちゃんは国語が好きか。

ルミ ルミも！ ルミも好きー！

男 そうかそうか。キミたちは、学校が、好きか？

ユキ 好き！ 学校好き！

ルミ ルミも、ルミも学校好きー！

テル 僕も！

トシ 学校来たらみんなで遊べるしなー。

男 そうか。キミたちは仲がいいんだな。

アキえー、男子は意地悪だよね。

ルミ ねー。

チカ 先生、授業！

チカ、教科書を男の鼻先に突きつける。

風が強くなつたのだろうか。ゴウゴウと音がする。

男 え。なに、あの音。

テル 友軍機じや！

男 友軍機？

子供たち、窓辺に駆け寄る。

テル あ、ほら、パイロットが見える。おおい！――

子供たち、しきりと手を振つている。

男も子供たちにつられて窓辺に行く。

男 なんだ？ 飛行機がこっちに向かつてゐる。

子ら おおい、おおい――！

飛行機はまつすぐこちらに向かつてゐるようだ。

トシ ちがうつ あれは友軍機やない！

クニ 敵機じや！ 敵機が攻めて來たあ。

チカ なんてつ。空襲警報解除になつたばかりやん！

ぱりぱりと音をたてて敵機が近づいてくる。

ルミ 悪いよ、先生！

アキ 助けて先生！

子ら 先生ッ！！

パニックを起こす子供たちがそのまま時を止める。(ストップモーション)

男 なんだ、何が起こってるんだ！？

大きな爆音がして、暗転。

機銃掃射の音だけが響く。それはまるでトタンを打ち付ける雨のように。照明が戻ると、そこはまるで何事もなかつたのような教室。

先ほどの子供たちは気配すらない。

蝉の声。

男は、ひとり茫然と立ち尽くしている。

男 いよいよおかしくなったのかな、俺……だとしたら……ずいぶん優秀な脳だ。ここまでありありとして生々しい妄想……病院、行かなきや……。

出て行こうとする男。

先ほど拾った本を手に持ったままなのに気がつき、引き返し、本を教壇に置く。とそこへ、女ともうひとりの男現れる。

もうひとりの男 ああ、いたいた。

男 あ…。

女 ああ、ほんとだ。いた？

男え？ 子供たち？

女子供？ 何言つてんの？ おばあさんだよ、いた？

男あ…ああ。

もうひとりの男 いたのか？

男あ、いや。おばあさんは…。

もうひとりの男 いないのか？

男あ、ああ。

もうひとりの男 どっちなんだよ。

男おばあさんは、見てない。

もうひとりの男 おばあさんは？

女ちゃんと探した？

男あー、いや…。

もうひとりの男 キミ、ほんと煮え切らないなあ。

男いや、ちょっと、混乱して…。

女混乱？

もうひとりの男 あれ？

女どうしたの？

もうひとりの男 携帯がつながらないんだ。この島つて圏外なの？

女そんなことないですよ。え、やだ、私のも。あなたのは？

男ごめ…、俺携帯持つてない。

もうひとりの男 ほんと使えないな。

男え？

もうひとりの男 だから、携帯が。

男ああ。

女電波的不具合ですかね？

男は？

もうひとりの男 とりあえず、ここにもいないうだから、交番にでも届けて、マグロでも食べに行きますか！

男 僕は結構です。

もうひとりの男 なんでー。ここ来たら、マグロ食べなきやうそでしょ。

男 もう、食べたんで。

もうひとりの男 なにそれ。抜け駆け？

男 ええ？

もうひとりの男 ひどいなあ。

男 いや、なんで……。

もうひとりの男 信じられない。ひどい裏切りだ。

男 裏切りって、食べたのはあなたと会う前……。

女 ちょっと、ちょっと。

男 え。

女 私が連れて行つたってことは内緒ですよ。

男 なんで。

女 私の心証悪くなっちゃうじゃないですか。

男 は？

女 ひとりで勝手に行つたことにしてください。

男 いいんですけど。

女 よかった。

もうひとりの男 あ、雨。

いつの間にか蝉の声は雨の音に変わっていた。

女 え。ほんとだ、結構降ってますね。

なるほど、激しい雨音。

もうひとりの男 いきなりすげーな。スコールか？ 熱帯化してるなあ、この島も。こんなところで環境問題を考えるとは。
女 こりや、やむの待つしかないですねー。

窓の外からはゴウゴウと音がし始める。

もうひとりの男 なんだあの音。

女 なんか、外暗くなつてきましたね。

もうひとりの男 嵐か？

女 おばあさん、大丈夫かなあ。

もうひとりの男 キミ、やさしいなあ。

男 どつか建物に避難してますよ、きっと。

ほうひとりの男 キミ、冷たいなあ。

男 え、普通でしょ。

もうひとりの男 うまかつた？

男 え？

もうひとりの男 抜け駆けしたやつ。

男 ああ、マグロ？

もうひとりの男 自覚はあるんだ。

男 自覚って？

もうひとりの男 抜け駆けしたって自覚。

男 あなたがそう言つたんでしよう。

もうひとりの男 うまかつた？

男 なんか、殺氣を帶びませんか？

もうひとりの男 うまかつた？

女 そりゃ、芸術家さんなんですよね。(話題を変えようとして)

もうひとりの男 うん。

女 島へは何しに?

もうひとりの男 マグロを食べに。

女 ああ。(変わらなかつた)

もうひとりの男 うまかつたー?.

男 : .

女 あのー、芸術ってのは、どういう?

もうひとりの男 何だと思う?

女 絵描きさん。

もうひとりの男 んー、近いけど、違う。キミ、何だと思う?

男 さあ。

もうひとりの男 ノリが悪いなあ、なんか言えよ。何か? 自分はもうマグロを食っちゃつたから、食つてない男には付き合えないっていうアレか?

男 はあ?

女 お願ひします、なんか言ってください。ずっと続きますよ。マグロ責め。

男 えと……陶芸家?

もうひとりの男 全然違う。

男 : .

女 あっ、ダンサー?

もうひとりの男 憐しい! はい。

男 : . 書道家。

もうひとりの男 まったく的外れ

男 はいはい。

女 えー、何だろう。

もうひとりの男 知りたい?

女 はい。

もうひとりの男 知りたい?
男 や、別に…。

女に肘鉄を食らう。

男 知りたいような…気がしてきました。

どこか遠く電話が鳴っている。

もうひとりの男 電話。

女え? でんわ?

もうひとりの男 鳴ってない? 電話。

女 あ、ほんとだ。

もうひとりの男 借りればいいんじゃない?

女 借りる?

もうひとりの男 電話だよ。固定電話ならつながるっしょ。

女 ああ、そつか。

もうひとりの男 職員室かなあ。

女 ですかねー。

もうひとりの男 ちょっと行ってみるわ。

男 ああ、はい。

女 私も。

男 はい。

もうひとりの男 キミは?

男 かけるどこ、ないんで。
もうひとりの男 あ、そ。

二人、出でいく。

男、窓を見る。

男 飛行機……あんなにはつきりと見えるなんて。かなりやばいよな。

男の目が再び本にとまる。思わず手に取る。

男 ……なんか耳鳴りがする…。

雨の音はいつの間にか蝉の合唱にとって代わられてゆく。

男 え、雨、やんだ？

蝉の声の中に、子供の「せんせー」とささやく声が混ざってゆく。

しきりに頭を振り、耳を気にする男。

蝉の声に紛れて子供たちが姿を現し始める。

子供たちはまるで湧くように、客席から現れる。

ルミ、途中で転んだりしながら。

ルミ 待つてー。靴ぬげたー。

子供たち舞台に上がってくる。

トシ せんせい、おはよー。
チカ おはようございます。

などと口々に。

男え…、またか…。

男、がっくりする。

ルミせんせー。せんせー、ここ痛い。

男どこ？

ルミーー。

男ああ、すりむいてるね。転んだのかな？

クニルミのやつまた甘えとる。

テルこいつ、こないだ弟ができたもんやけ、構つてもらえんごとなつたもんやけ。

トシこげえやつてせんせーに甘えるんで。

ルミ違うもん。ほんとに痛いもん。

クニどこがじや。見せてみい。

ルミいやじや。クニちゃんなんかに見せん。

クニやっぱうそじや、うそじや。

トシルミの甘えた（甘えん坊の意）。うそつき毛虫。

ルミ嘘じやなーーい。

クニ・テル・トシうつそつき、うつそつき、うつそつき。

今にも泣き出しそうなルミ。

男の上着の裾を握つて離さない。

男ちょっと、君たち、やめなさい。

クニ・テル・トシ、気をつけの姿勢になる。

男 えっと…小さな女の子を三人がかりでいじめるのはかっこよくないな。

クニ はい。

テル ごめんなさい。

トシ すみません。

男 …素直だな。これは俺の願望なのか?

ルミが、男の上着の裾を引っ張っている。

ルミ 先生、遊ぼ。

男 え?

ルミ あーそーぼー。

クニ おう、遊ぼう、遊ぼう。

テル 僕も遊ぶー。

男 遊ぶ? そうだ。本来子供はそうでなきやいかん。結構、結構。多いに結構。
クニ けつこう、けつこう、こけつこうー。

子供たち、男の言葉が気に入ったようだ。

ロ々に「けつこう、けつこう。こけつこう」と言つてはしゃいでいる。

ユキはその輪に入らず、寂しげにしている。

男 どうしたの? ユキちゃん、だつたね。元気ないけど。

ユキ 明日な、おにい(兄)が遠いところに行くって。

男 遠いところ?

ユキ ゆうべユキに言ったの。もう会えんかもしれんって。ユキにおかあのこと頼むって。

泣き出すユキ。

男 大丈夫だよ、ユキちゃん。お兄さんはなんでも、そんなことをつ、きっと、また会えるよ。

ユキ ほんと、先生？

男 うん、きっと。

チカ 先生、そんないい加減な」と言つちやだめだよ。

男 え。

チカ うちの父ちゃんは帰つてこんかつたよ。

ユキ うう…。(再び泣きかける)

アキ チカちゃん。

チカ : : めん。ユキのところはきっと帰つてくるよ。

ユキ チカちゃん…。

男あの、お父さんはどこへ行つたの？

チカ 南方。

男 南方？

ルミ ねーー、遊ぼ。
男 え、ああ。

ルミ ケッコー先生。

男 ケッコー先生！?

トシケッコー先生、かけっこしよう、かケッコー。

男 かけっこ？

クニ けつこう、けつこう、かけっこう――!

ルミ あたしもする。あたしも！

クニ ばーか、女のお前についてこれるもんか。

アキ づるい、男子ばつか。

男 わかつた、みんなでかけっこだ、な。

ルミ わーい。

子ら チッコー、チッコー、カチッコー。

男 よーし、みんな並んで。

チカ 行こ、ユキ。

チカ、ユキも列に並ばせる。

子供たち、一列に並ぶ。

テル 僕が合図する。

ルミ づるい、あたしがする。

男 わかつた。せーの、で、みんなで合図だ。いいか?

子ら はい。

男 せーの!

子ら よーい、どん。

よーいどん、のかけ声とともにスローモーションに。

スローモーションでゆっくり駆け抜ける子供たち。

男 なんという素朴な子供たちだ。凝り固まつた僕の心がほぐれてゆく。こんな子ばかりならば、学校生活もどんなにか愉快だろう。いつまでもこのままこの島の先生になってしまおうか。これが僕の妄想でないのなら。

動きが戻る。

子供たち、息を切らしたり、やつたあなど口々にわいわいしている。

男 さあ、次は何して遊ぼうか。

クニ お山に行きたい！

テル ああ、俺も行きたい。

チカ 何言ってんの、無理に決まつとるやろ。

男 お山って？

トシ お山はお山。

ルミ ほらー！

子供が指差す窓の向こうには山が見えていた。

チカ 窓から見えるあの山は。

アキ 島にたつたひとつのお山。

男 へえ。なんて山？

ルミ 遠い山。

男 遠い山？ それは山の名前なのかい？

トシ そうだよー。遠い山。

男 ふうん。そりや奇妙だ。

ルミ 奇妙つて。

男 第一ちつとも遠くない。むしろ近い山つてほうがしつくりくる。ひよいと散歩にでも出かけたくなる近さだ。

チカ 散歩には行けないよ、あの山は。

男 どうして？ あ、もしかして、遠近感がおかしなことになつてゐるのかい、あの山は。あり得るな。この島に来てからおかしなこと継ぎだもの。

うん、きっとそうだ。近くに見えて実はうんと遠い、遠い山とか？

アキ 遠くはないけれど。

クニ 毎日遊んだ山だけど。

トシ でも今はだめなんだ。

男 ははあ、危ないから立ち入り禁止になつたんだな。子供の事故でもあつたんだろう。

ルミ 事故？ 事故つちなん（何）？

男 お友達の誰かが迷子になつたとか、ケガをしたとか。

クニ 迷子なんかならん。

テル 庭みたいなもんやもんな。

男 山が庭か。今時めずらしいな。この島の子供たちはのびのびしてるんだな。
クニ 遠い山にはおれらの巣があつたんで。

男 巣？

テル 秘密の巣。

男 秘密基地か！ へえ、すごいな。

トシ あーあ、俺たちの巣、どうなつたかなあー。

男 どうして行けなくなっちゃつたの？

チカ それはね‥。

鐘が激しく叩かれる音。

男 あ。

テル 警報じや。

チカ みんな、走るよ！

男 え、なに？

チカ 先生も、早く！

男 早くつて、どこへ？

トシ 防空壕じや！

子供たち、転げるよう教室を出る。（客席へ）

男 防空壕??

男、子供たちの後を追つて出ようとする。

そこへ、女ともうひとりの男が戻つてくる。

いつの間にか雨音も戻つている。

女ダメでしたあー。

男え。

もうひとりの男 職員室、鍵かかつてた。

男あの…子供…見たりしません…よね?

もうひとりの男 子供? いるわけないだろう、夏休みじゃないか、今。

女大人も子供も、猫の子一匹いませんよ、この校舎の中。

男 猫の子一匹…。あの、鐘、鐘は鳴つてました、よね。

もうひとりの男 はあ?

男 鐘です、鐘。

もうひとりの男 鳴つてたのは電話、だ。

男 電話…。

女 雷は鳴つてたかも、遠くのほうで。

もうひとりの男 大丈夫か、キミ。

女で、なんでしたっけ? 何の話してましたっけ? 私たち。

もうひとりの男 ひどいなあ、俺の仕事、聞いてたんじゃないか、ノリノリいで。

女でした、でした。

もひとりの男 で、知りたい?

女知りたーい。

女、興味を示さない男に肘鉄を食らわす。

男 あ、はい、知りたいです。

もうひとりの男 そう？ ジャア、言うけど。実は俺、仏師なの。

女
え?
?

もうひとりの男仏師、仏師。

男一ノシ(三)

女なんですか、それ。

男 もしかして、仮に師匠の師を書いて……。

もうひとりの男
仏師。

もうひとりの男 ム様を形容する言葉は。

間

もうひとりの男 え？ え？ それなんの驚き？

男
一番遠い気がする……。

女すこいいあれ、廻ってる人いるんですね。

男そりやいるでしょ

女この島へはやーはりあれですか？なんか二三仏様を勧るための心の癒しを求めて

女 マグロジッテ。

男さつきからそうおっしゃつてる。

女 今どんなの彫つてるんですか？

もうひとりの男 今はね台座。

女台座？

もうひとりの男 仏様の足下の、花の形した台。

女 ああ、なんとなく。へえ、それも彌るんですか。

もうひとりの男 もちろん。

女 どうして仏師になろうと思つたんですか？

もうひとりの男 国宝第一号って何だつたか知つてる？

男 え、何ですか、急に。

女 何かなあ。国の宝でしょう。富士山とか。

男 おいおい。

もうひとりの男 惜しい！

男 ええええ。

女 え？ 惜しい？ なんだろ。

もうひとりの男 ヒントあげようか？

女 お願いします。

もう一人の男 じゃあねえ……。

男 広隆寺半跏思惟像。

もうひとりの男！

女 え？ え？ ハンカチ？

男 広隆寺半跏思惟像。または広隆寺弥勒菩薩像。

もうひとりの男 あー、もう。なんで言っちゃうかな。

男 なんでって……聞かれたし……知つてたから。

もうひとりの男 つまんないでしょ、言つちやつたら。今、この人から答えを引き出そうとしてたのに。あのね、最初から正解を与えればいいって もんじやないんだよ。

男 ……。

女 広隆寺……なんでしたつけ？

もうひとりの男 半跏思惟像。片足をね、もう一方の腿にのせる姿勢を半跏つて言うんだよ。半跏の姿勢で、こう、右手を軽く頬に触れてね、 物思う弥勒さまの像なんだ。

女 なんか、教科書かなんかで、見たことあるようない。

もうひとりの男 うん、教科書にも載ってるね。だけど実際見たらもう全然違うんだ。すごみがね、あるんだ。それほど美しいんだ。美しい

だよ、これが。もうね、俺一目惚れ。それで俺も生み出したいって思つたんだ。自分のこの手でね。

女 へえ~。で、できたんですか、あなたの弥勒さま。

もうひとりの男 それが、できたのは台座ばかり。今のでね、台座は36個めなんだ。

男 36!~? どうかしている。

もうひとりの男 どんなに美しい台座も彼女を迎えるには足りない。そう思つて先に進めないんだな、これが。

女 ああ、なんか、わかるなあー、その気持ち。

男 え、わかるんですか?

女 きっとすごく魅力的な女性なんです。

もうひとりの男 あ、性別は超越しちゃてるんだけどね。まあ、惚れ込んじゃった便宜上、ね。

女 仏像はまだ一体も作つてないんですか?

もうひとりの男 僕はね、一体だけつて決めてるんだ。だからそうやすやすとは取り掛かれないと。

女 それで台座ばかり? ん~,なんか口マンティック。

男 え?

もうひとりの男 今度の台座で36個め。36と書いてミロクと読む。だからね、今度こそ、彼女を迎えられそうな気がする。
女 いよいよなんですねーーー! でも大丈夫なんですか? 仏像はまだ一体も彫つてないんですけどよね。

もうひとりの男 ドラえもんとか、仮面ライダーとか、ビリケン様とか、招き猫とか、いろいろ練習はしてるんだ。

男 それは仏師と言えるのか?

もうひとりの男 自覚の問題さ。僕は仏師としての自覚がちゃああんとある。

女 ええ、自覚は大事です。

もうひとりの男 キミの仕事はなんなの?

女 私は、役所です。

もうひとりの男 そうなんだ。

女 つまんない仕事ですよ。

もうひとりの男 やりがいを感じてないの?

女 やりがいかあー。・・・づぶされちゃいました。

男え…だって、キミあんなに生き生きと僕にゴリ押ししてたじゃないか。

女ゴリ押しつて。

男ごめん…。

女すかしつペですよ。

男すかしつペ?

女最後の力振り絞ったんです、これでも。でもね、ダメだった。結局空振り。すつかすかのすかしつペ。ばかみたい、私。上はね、ただ言われたことだけやってる従順な部下を望んでるんです。レールから外れちゃだめ。自分で何かをしようとしちゃだめ。

もうひとりの男、女の頭をなでなでする。

女え…?

もうひとりの男 弥勒さまってね、未来仏なんだよ。

女みらいぶつ?

もうひとりの男 未来を救う仏様なんだ。

女へえ…よくわかんないけど、すごそう。

もうひとりの男 地球どころかさあ、太陽系まで滅びちゃった、世界の終わりに現れて、救済からあぶれちゃった人々を救うんだ。すんごいヒ

ーローだと思わない?

男ヒーローって…。さつきは女性扱いしてたような…。

もうひとりの男 キミ、細かいなあ。

女よくないですよ、そういうの。

男…ごめんなさい。

もうひとりの男 未来を救うつてすごいと思わない? 地球も宇宙も滅びちゃうような悲惨な世界にも救いはある。未来はある。光はある。

今に絶望しちゃいけないよ。なあーんてね。

男気障な台詞。

女また!

男ごめん。

女 未来の光。いいですね。

もうひとりの男 でしょ。

女 私も、あなたの彫る弥勒さまに会いたいなあ。

もうひとりの男 うん。そのときが来たら会わせてあげるよ。

男 未来もいいけど、僕たちには今、救済が必要だと思いませんか。

もうひとりの男 夢のない男だなあ。

女 救済というか、傘ね、今必要なのは。

もうひとりの男 もはや傘じゃ防げないでしょ。飛んでつちやうよ。

しばじゴウゴウという風の音を聞く。

女 すごい音。

男 どこかで聞いたことのあるような……。

もうひとりの男 この音……。

土砂降りの雨の音。

女 いやな音。トタンにでも当たつてるとかしら……。

男 この音は……。

もうひとりの男、教卓の本に気づく。

もうひとりの男 ん、なんだ、この本。

女 なんですか？

女、のぞき込む。

女 「穂戸乃島の歴史？」
もうひとりの男 来るぞ。
女 え、なに？

ひとりわ大きな雷鳴。

眩しい光。

暗転。

一体何が起こったのか。

照明が入る。

男 うう…いってえ…。

気が付くと、女ともうひとりの男はいない。
倒れた勢いで本が投げ出されている。

男 あ、あれ？ ちょっと、ど、いっちゃんたんですか！？

と、子供が走り込んでくる。

ルミ せんせい！

男 ひつ。

ルミ 先生？

男 あ…ああ…キミ。

ルミ 先生、おはよーございまーす。

男 キミたしか…ルミちゃん？

ルミ 今日、日直やにー。（「日直なの一」の意）

男 日直…。

ルミ、黒板に名前を書いている。

男、ぼんやりとそれを眺めつつ…。

男 まだ続くのか、この妄想は。

子供たち、次々と入って来る。

チカ おはようございまーす。

男 ああ、おはよう、って何、条件反射！ …つま、いつか。
トシ ケツコー先生、またかけっこしよう。

男 ケツコー先生。

トシ いしししし。

男 いいぞ、しよう。

テル やつたあ。

男、早くも子供たちの様子に癒され始めたようだ。

チカ ちょっと男子、その前にやることあるでしょう。

男 やること？

不意に笛の音が鳴り響く。

唐突に男の軍人と、女軍人が現れる。

それぞれ、もうひとりの男、女に似ている。

女軍人 せいれーつ！

子ら、信じがたい機敏さで列になる。

男 えつ。すぐ…。

軍人 番号！

子ら、番号を唱える。

なぜだか36まで数える。

そんなにたくさんいたどうか。

(子役の数が足りなくとも36まで繰り返す。)

子 一。

子 36。

男 36、えつ、36？ そんなにいたか？

女軍人 何をしとる、貴様も並ばなんか！

男 あの、あなた何してるんですか？

女軍人 駐れ駻れしい口を聞くな！

女軍人 いきなり男を殴る。

男 なつ、何をするんですかあ。

ルミ 先生、こつち、こつちだよ。

子供たち、男を決められた位置に並ばせ、麻袋を持たせる。

女軍人 全員いるかー。

子ら はいッ。

軍人 今日も、授業の前に、遠い山に砂袋を運ぶ。

子ら はいッー！

男 ちよつとあなた、何やって…。

チカ しつ。

男 え？

チカ また殴られたいの？

男 え…。

チカ 殴られるのがイヤなら、おとなしく言う」ときくしかないの。形だけでもね。

男 ずいぶん…大人びた言葉を使うんだね。

チカ そうしないと生きていけないから。

男 そうしないと生きていけない…これが…教育か？ 僕の生徒も…あのバレー部も…ソウシナイトイキティケナイ…。

ルミ どうしたの？ 先生。怖い顔して。

男 あ、ああ、ごめん。なんでもないよ。

女軍人 背(せい)の順にならべー！

子ら はいッ。

男 一体何が起こっているのか。起ころうとしているのか。僕の妄想の暴走はぐるぐると加速して…あ…目眩がする…。

子供たち、そんな男を尻目に、たくましく、愛らしく、慣れた様子でけなげに並ぶ。

アキ 先生、大丈夫？

チカ すぐに慣れるよ、先生。

男 すぐに、なれる?

軍人 袋を渡す!

子ら はい!

子供たち、砂の入った袋を一つずつ渡される。

子供たちは赤ん坊を背負うように、砂の入った麻袋を背負って歩来だす。

もう何がなんだか理解不能で、その様子を眺めるばかりの男。

軍人 おい、何をしとる。さつさこと並ばんか。

男 え。いや、僕は…。

チカ 早く!

チカ、男を列に並ばせる。

軍人 いいか、しつかり足を踏ん張つて、ひとつぶの砂もこぼすんじゃないぞ。

女軍人、ピリ。ピリと笛を吹く。

女軍人 進めー。

子供たち、歩き出す。

男も、女軍人にジロリと睨まれて、子供たちの動きに従う。

男 ねえ、これどこに向かってるの?
ルミ 遠い山だよ。

男 遠い山？ 君たちの巣があると言つてたあの山か？

トシ そうじゃあ。

男 あれ？ 行けないって言つてなかつたか。その山。

クニ 行かないといけないんだ。みんな。

男 行けない、じやなくて、行かないといけない、なのか、ほんとは。テル みんなで砂をお山のてっぺんまで運ぶんだ。

男 なんの為に。

テル 知らん。

チカ 監視所ができるんだって。

男 監視所？

チカ 遠い山のてっぺんに。

トシ 監視所かー。なんか、かつこいいな。

ルミ 監視所、監視所。

男 ねえ、キミ。ええと、名前。

チカ チカ。

男 チカちゃん。監視所って、一体何を監視するんだい？

チカ 敵の潜水艦を見張るんだって。

男 敵の潜水艦？ 敵つて？？ なんで、こんなところに。尖閣でも竹島でもないだろ、ここは。誰に聞いたの？

チカ うちは一番上の兄ちゃんが兵隊さんやけん。監視所作るために、帰つて來たけん。

男 兵隊…自衛隊か？ しかしながら、こんな子供を働かせる？ 体験学習か？ いや、違う、これは俺の妄想だ…。

男、軍人と目が合つて。

男 ようこそ、僕の妄想へ。

軍人 貴様、何をわかのわからんことを。
チカ 先生！

チカ、男を列に戻す。

と、ユキが重さに耐えかねて歩けないでいる。

男 大丈夫？ 貸してござらん。

男、ユキから袋を受け取り、自分が2つ持つ。

ユキ 先生、すごいね。

男 ほら、楽になつたろう。

ルミ 先生、力持ち。

チカ そんなことしても無駄だよ。

男 なんで。

ピリ。ピリと笛が鳴る。

女軍人 そこのちび、戻つてこい！ 袋を持ってーい。急げるなッ！ ばかもの！

ユキ、さつきよりたくさん砂の入つた重い袋を背負わされ、転ぶ。

男、駆け寄る。

男 大丈夫？

チカ 兵隊さんの目を盗んだりなんかできないんだから。

男、軍人に歩み寄る。

チカ ちよつと、先生。

男 これが僕の妄想なら、僕に責任がある。

チカ 先生?

男 ちよつと、待って下さい。なんで、こんな小さな子供に、こんなことさせんんですか。

軍人 なんだ貴様?

男 この子たちの…先生です。

軍人 先生? 先生なら、子供たちに、もつとがんばれと叱咤激励するのがつとめだらう。

男 教師のつとめは、子供たちをまっすぐ健やかに育むことだ。こんなつらい惨めな思いをさせることじやない。

軍人 ばかものッ。

軍人、男を殴る。

男 何を。

軍人 この戦に負けたら、こいつらはもっと惨めなつらい思いをするのだ。それがわからんのか! 貴様それでも教師か!

男 はあ?

軍人 すべてはこいつらのためだ。こいつらのために殴つてるのだ。

男 子供たちのために殴る?

軍人 そうだ。子供たちの未来のために。

男 子供たちの未来のため…。

チカ、男の手を引っ張つて、軍人のもとから離す。

チカ 先生、何やつてんの。

男 何つて。ひどいじゃないか、あいつ…。

チカ 先生、もうやめて。

男 なんで。

チカ よけいひどい目に遭うから。

男 ごめん。…ごめん。

ユキ せんせい？

ルミ 先生…。

ユキ、不安そうに男を見る。

男 ごめんな、ユキちゃん。ほら、半分こつちに移そう。
チカ 先生…。

男、ルミの砂を減らしてやる。(自分の袋に移す)

テル 先生はやさしいなー。

男 こんな小さな子が大変な思いしてるんだ。助けてやるのが男だろ。
クニ そうだな、男だな。

クニ、やおらチカやアキやルミの袋の中身を自分の袋に移し替える。

アキ ちょっと、何するん。

クニに倣って、トシ、テルも同じく。

ルミ せんせー、うちの男子はやさしいな。
男 そうだなあ。えらいなあ。
クニ えへへ。
テル えへへ。

トシえへへ。

アキありがと。

チカありがと。

ルミありがと、ありがと、ありがとーう。

男えらいなあ、みんな、えらいなあ。

思わず和み、子供たちの頭をなで回す男。

女軍人 こらー、さつさと歩かんかーー！

女軍人、ピリ。ピリと笛を吹く。

男 行こう。

子らはーい。

男を囲み、歩き始める子供たち。

男 自分の妄想から逃げられるわけなんてないんだから、従うしかない。

と、そこへ唐突に響く鐘の音。それは激しく。

男 まだだ…またあの鐘…。

軍人 空襲警報だ！

男 空襲？

近づいてくる飛行機の爆音。

女軍人 B29です！B29が低空飛行でこっちに近づいてきています。

軍人 防空壕だ、防空壕へ走れ！

男 防空壕？

チカ 先生、こっち！

近づく飛行機の爆音。

逃げ惑う子供や大人。

飛行機は爆弾ではなく、たくさんのビラを投下して去っていった。

テル なん、あれ。

アキ 見て、飛行機がなんかバラまいとる。

トシ なんや、なんや！

女軍人。ピリ。ピリと笛を吹く。

軍人 ばかもの！拾ってはいかん！拾えば非国民として連行するぞ！わかつたな！

子供たち、手にしていたビラを慌てて捨てる。

女軍人慌ててビラを回収する。

ストップモーション。

男 真っ青な空に、爆撃機の腹がきらりと光った。そしてそれは、まるで青い青い海の中で、銀色の鱗を持つ小さな魚が、その命をつなぐためにたくさんの卵を水中に放つ時のように、その腹から無数の白い紙切れをバラまいて行ったのだ。それは満開のまま散りゆく桜のように、あるいは強い風におおられる白い白い月見草のように、僕には見えた。僕は、思わずその花に手を伸ばした。

男、ビラの一枚を拾う。
ビラを読む。

男 日本国民に告ぐ。近いうちに激しい戦ひがこの島で行われます。すでに沖縄は…。

男がビラを手にしているのに気づく軍人。

チカ 先生！

軍人 貴様、何をしとるかーーー！

子どもたち 先生ーー！

軍人、スコップを男に振りかざす。

男、殴られると同時に暗転。

雨の音。

女の声がする。

女の声 ねえ、ちょっと。もしもーし。

照明入ると、もとの教室。

男 あれ？ イテッ…。

女 大丈夫ですか？ 頭打ちました？

男 わあわあわあ。

もうひとりの男と女の顔を見て思わず身構える男。

女 ちよ、何やってんすか？ やっぱり頭、打ちました？

男 え？ え？

もうひとりの男 確かにすごい雷、打ったけど。驚きすぎだらう、キミ。

男 雷？

女 近かつたし。

もうひとりの男 うん、近くに落ちたな、ありや。

女 雨もますますひどくなつてる気がする…。

もうひとりの男 ひょっとして台風つて来てた？

女 聞いてないですよ。

男 全部、夢…？

しかし、男の手にはさきほど拾つたビラがしつかりと…。

男 いや、夢じゃない。このビラ…あ、あれ？ これ…。

それは、女の作ったチラシに変わっていた。

もうひとりの男 なんだよ、やけに気に入つてるなあ、そのチラシ。

女 白状します。

もうひとりの男 はい？

女 …実はそれ、私が作つたんです。

もうひとりの男 え。

女 私が作つたんです。

もうひとりの男 あつ、ああ、そうなの。…よく見るとなかなかよくできてるなー、これ。

女 お気遣いは結構です。なんか、何をやってもうまくいかないんですね、ハハ。学生時代から。なんか、なんのために生きてるんだろうって、思いたくないじゃないですか。でも、だからって生きがいみたいなものも見つからないし。だったら、もうこうなつたら仕事に生きようって決めて。島への配属も自分で志願したんです。すごく張り切つたんですけどね。なんかぜんぜんうまくいかなくて…。
もうひとりの男 そうなんだ。

女 羨ましいです。

もうひとりの男 え、俺?

女 自分の道、しつかりしてて。やっぱダメなのかなー、私。

もうひとりの男 んーーー。俺も白状しちゃおうつかなあ。

女 は?

もうひとりの男 さつきさ、歩いてるとき。言つたじやん。居場所がないって。

女 ああ、はい。

もうひとりの男 俺も居場所なくして、逃げ出した。

女 そ、うなんですか?

もうひとりの男 俺、子供のころに親を亡くしてね。親戚が寺やつてつから、そこに預けられたの。その寺、保育園もやつてたし、ちょうどいいじ
やんて。でさ、そこんち女の子しかいなかつたんだけど、それがまた奔放な子でね。大学在学中にできちゃつた婚。で、もうこうなりや、俺に
嫁あてがつて寺継がせようつて…。

女 お坊さんになりたくないくて?

もうひとりの男 いや、なんだろ? 家庭持つて考えたらね、なんか想像できなくてさ。親知らないから。なれんのか、俺つて。お見合いすっぽ
かして、船にのっちゃつた。

女 じゃあ、仏像彫るつてのは…。
もうひとりの男 それはほんとう。

女 そつか。

男 逃げるのは悪いことなのかな…。

女 え。

男 だつて逃げないといけないときもある…。
女 どんな時?

男 … 空襲とか。

もうひとりの男 おいおいなんの話をしてるんだ。

女 きょくたん。

もうひとりの男 僕さ、こんなこと人に話したの初めて。不思議だな。

女 ほつとする島ですから、ここは。そういう不思議な力があるんですよ、きっと。

もうひとりの男 キミはこの島がほんとに好きなんだなあ。

女 この島の出でもないんですけどね。不思議ですよね。…やっぱり、仕事やめたくないなー。今はまだ。

もうひとりの男 キミは? キミは何してんの?

男 僕は…臨時で…公務員を…。

女 あら! ご同業?

男え…そうなるかのなあ…。

もうひとりの男 で、キミも仕事に行き詰つてると。

男 なんで。

もうひとりの男 そういう顔だよ、キミ。

女 言えてる。

男、思わず自分の顔をなでまわす。

もうひとりの男 なんかシュールだな。縁もゆかりもない三人が夏休みの小学校の教室で、雨に閉じ込められて自らの人生を振り返る。

女 ね、やっぱりそういう島なんですよ、ここは。

男 そういう島…。

女、チラシを見る。

女 誰もがぐっときて、もう、この島に来ずにはいられなくなるような、そんなチラシを作れないかなー。なんか、悔しいもん、このままだったら、ね、なんかいいアイデアないですか?

もうひとりの男 僕はね、仏像の台座を作っている。

女ええ。でも台座だつて、アートじゃないですか。

もうひとりの男 もちろんさ。僕は自分の芸術的センスについては、一ミリの疑問も抱いてはいない。

女だから、その芸術的センスで…。

もうひとりの男 僕の台座は弥勒さまあつてのものなんだ。

女そりや、そうでしょう。え？ 何の話？

男チラシの中身の話、たぶん。

女中身？

もうひとりの男 そう！ いかにすばらしい台座を作ったところで、上に載る仏様がみすばらしければ、かえって逆効果というものだ。考えてごらん。

女あ！ チラシが台座で、この島が弥勒様…ってこと？

もうひとりの男 そう。キミは頭がいい。

女いやあ、それほどでも…。

もうひとりの男 では聞こう。この島の魅力は？

女のんびりしてるとこ。

もうひとりの男 ほかは？

女マグロがおいしい！

もうひとりの男 それから？

女えと…海が、きれい？

もうひとりの男 それから？

女えつと…町並みが独特。

もうひとりの男 ほかは？

女うーーーん。なんかない？

男えつ？ 僕に聞く？

女旅行者の目で見て。

男ええと…猫が多い。

女 それって、魅力ですか？

男 猫が好きな人にとっては。

女 そうか。

もうひとりの男 まずはね、島のことをどことん知らなきやね。そりやもう、すみからすみまで。そうして初めて、いい作品が生まれるんだ。

女 なるほど。

男 遠い山。

もうひとりの男 え？

男 遠い山のこと、知りたい。

もうひとりの男 遠い山？？

女 ああ、あの山です。遠井山。

3人、窓に近づく。

男 遠井山には、何か施設のようなものはない？

女 施設？ ないんじゃないですか。なんか、アンテナみたいなのは立つてますけど。

窓の外を見る3人。

男 アンテナ…もしかして潜水艦を見張る？

女 は？ 潜水艦？ 何言つてんすか。テレビかなんかのでしょ。

男 ああ…そか。

女 潜水艦て…。

教室に入つてくる老婆。

老婆 遠井山には軍の監視所があつたんじや。

女 おばあさん！

男え。

もうひとりの男 びっくりだな。どこにいたんですか？

老婆 監視所じや。

もうひとりの男 ええ？

男 その、監視所を作るときに、子供たちで、砂、運んだりしました？

老婆 そうそう。わしら、島のもんが大人も子供も総動員で山の上まで砂を運んでなあ。

男 まさか…。

老婆 島のみんなで楽しみにしどつた運動会もなんもかんも中止になつて。学校も半日それでつぶれてな。あのころは、勉強しどうても、できんかった。

女 へえ、そんなことが…。でも、あなた、なんで知つてるんですか？ 監視所のこと。

男 いや…なんか…そななのかなあつて…。

女 千里眼的な？

男 えつ。

女 子供たちが砂を運ぶ風景が、脳裏に浮かんだんですね。

男 脳裏についていうか…この目で見ちゃつたっていうか…。

女 …すごい。

男 あ、いや…。

もうひとりの男 ああ、ほらあつた。学級文庫。「穂戸之島の歴史」。これを読んだんだろう。俺たちが必死にお婆さん探してるときに。

それは先ほどの本。

学級文庫として同じ本が何冊も棚に置かれている。

男 その本…。

もうひとりの男 読んだんだろう？

女 なんだ。イカサマー？

男 読んでないよ、まだ。

女 またまたー。

もうひとりの男 キミも読んだ方がいい。(本を一冊、渡す。)

女 ですね。

男 しかし、いったい何を監視するんです? あんな山のてっぺんから。

老婆 こここの海はなあ、沖縄から本土へ、敵が攻め入るときには必ず通る海じゃけえ。

女 敵つて…潜水艦…? …やっぱり!(読んでるんじゃないですか)

老婆 あと3週間…。

男 はい?

老婆 あと3週間早く戦争が終わっていれば、あんな地獄は見ずにすんだんじや。

男 地獄? …じゃ、あのあと…。

老婆 あの日…この島は地獄になつた。

女 この島が…。

もうひとりの男 地獄?

3人、それぞれ本の表紙を開く。

嵐がごうごうと音をたてる。

稻光で、部屋がちかちかする。

老婆 あの日…朝早くにグラマンが来たつつうて、空襲警報が鳴つた…。けどすぐに解除になつたんじや。それで学校行こう言うて…みんな行つてしまつた。うちは妹を…赤ん坊をおんぶしどつたけえ、行けんかつたんじや。

蝉の声。

先ほどと同じ、短い半鐘が断続的になる。

少女(老婆) あ、ほら、解除じや。空襲警報が解除になつた。

母（女）今日はもうこのまま休みんさい。おかあも畠が忙しいけん、ミサコの面倒みちよってよ。

少女 いやじゃ、学校行く。行きたい。

母 おども兵隊でおらんのじやけ、おかあが働かんといけんの。

少女 でもみんな学校へ行くよ。

婆（もうひとりの男）ああ、痛い。腰が痛い。

母 ほら、おばあも具合悪いって言いよるけん、帰るよ。

老婆・女・もうひとりの男、捌ける。

代わりに子供たちが、ひとりまたひとりと姿を現す。

この日の日直なのだろう子供が黒板に大きく7月25日と日付を入れる。

ルミ 一九四五年七月二十五日。

チカ この島に、2機のグラマンが静かにその陰を落としました。

アキ それはよく晴れた夏の日でした。

ユキ 空はどこまでも青く。

チカ 空を映した海は、さらに青く。

トシ その朝発動された空襲警報が。

テル 解除になつたばかりだったので。

クニ みんなすっかり気を許していたのです。

子ら その日。

チカ 朝9時過ぎに警報が解除になつて。

ルミ 私たちは三々五々、学校へ向かいました。

テル 中にはそのまま休んでしまつ生徒もいました。

アキ けれども私たちは学校が大好きだったので。

ユキ 警報が解除になると、すぐに家を飛び出しました。

トシ 授業があるのかどうかまだわからなかつたので。

ルミ 私たちは運動場で遊びました。

子供たちの遊ぶ姿。

クニ そのほどんどが山からなるこの島には。

テル 平地があまりありません。

ユキ だから、私たちの運動場はとても狭いのです。

トシ そのかわり、校舎は、2階建てです。

ルミ 自慢の校舎です。

アキ 私たちが校庭で遊んでいると。

チカ 始業の合図の半鐘になりました。

半鐘が鳴る。

かーん、かんかん。かんかん。かーん。かん。

テル それは朝礼なし。

クニ 授業開始を意味していました。

ルミ 私たちは教室へ走りました。

チカ 西校舎2階の私たちの教室へ。

子ら あの10時~4分に向かつて。

子供たち、男のもとへ駆け込んでくる。

男はすっかり子供たちの先生になっている。

アキ 授業が始まるで。ほら!

ルミ 待つて、靴が脱げた!

テル やーい、のろま。

アキ なんなん、ばーか。

チカ 先生、おはようございます！

男 おはよう。今日は、2限目からだぞ。なんだつたかな？

ルミ えつと。えつと。

ユキ 国語。

ルミ こくごー！

男 じゃあ、席について。教科書を広げて。

子ら はーい！

男 ではみんなで順番に読んでもらおう。

子ら はーい。

チカ サイタ サイタ サクラガ サイタ。

テル ヒノマルノハタ バンザイ バンザイ。

トシ ススメ ススメ ヘイタイ ススメ。

アキ オヒサマ アカイ アサヒガ アカイ。

クニ ハシレハシレ シロカテ アカカテ。

ユキ カラスガ キマス スズメガ キマス。

ルミ ソラガ ハレタ キレイニ ハレタ。先生、これっち、今日のことやな。

男 そうだな、今日もほんとに空がきれいだ。

みんな、窓の外を見やる。

飛行機の音が近づいてくる。

男 あれは……なんの音だ？

テル 友軍機だ！

男友軍機？

子供たち、窓辺に駆け寄る。

テル あ、ほら、パイロットが見える。おおいーー！

手を振るテル。つられて手を振る他の子たち。

トシ ちがうっ！ あれは友軍機やない！

クニ 敵機じや！ 敵機が攻めて来たあ。

チカ なんてつ。空襲警報解除になつたばかりやん！

ぱりぱりと音をたてて敵機が近づいてくる。

ルミ 怖いよ、先生！

アキ 助けて先生！

男 みんな、机の下にもぐって、早く！

子ら 先生ッ！

大きな衝撃音。

崩れ行く世界。

キエティクコドモタチ。

暗転。すべてが闇に飲み込まれて。

照明変化するともとの教室。

茫然とする男。

もうひとりの男と女、それぞれの本をぱたんと閉じる。

もうひとりの男 なんか、すごい話だなあ。

女 ですね…。

雨の音、ザアザアと。

女 雨、やみませんね。

もうひとりの男 どうした、顔が真っ青だぞ。

男 …もうやめてくれ。

女 それは無理ですよ。

男え…。

女 だって、まだまだ空真つ黒ですよ。ますます激しくなりそう。
もうひとりの男 こりやあ、なかなかこゝを出られそうにないぞ。
女 雨のせいかな。なんか、胸のあたりがシクシクするんです。

もう一人の男 それは恋じゃないのかい?

女 は?

もうひとりの男 …ひどい降りだなあー。

女 ですねー。

もうひとりの男 まるで空が泣いてるようだ。
女 号泣ですね。

もうひとりの男 腹減ったなあ。俺も号泣したい。
女 マグロ、食べに来たんだしたね、そう言えば。

もうひとりの男 そう、マグロ。

女 おいしいですよ、ここのマグロは。

もうひとりの男 チラシに特筆すべきだな。

女 ですね。そう言えば…おばあさん、私たちをどこへ案内してくれるつもりだったんですねかねえ。

振り返ると、老婆はぶつぶつと何事か唱えている。

老婆 日本ハ 春夏秋冬ノ ナガメノ ウツクシイ 国デス 山ヤ 川ヤ 海ノ キレインナ国デス コノヨイ国ニ 私タチハ 生マレマシタ オトウサン
モ オカアサンモ コノ国ニ オ生マレニナリマシタ オディイサンモ オバアサンモ コノ国ニ オ生マレニナリマシタ 日本 ヨイ国 キヨイ国 世界
ニヒトツノ 神ノ国 日本 ヨイ国 強イクニ 世界ニ カガヤク エライ国…。

女 なんだろ、あれ。

もうひとりの男 さあ。さつきの話で思い出しちゃったのかな、戦争中のこと。

女、本のページを改めてパラパラとめくる。

女 あっ。えっ？

もうひとりの男 どうかした？

女 これ、これ見てください。この写真。

もうひとりの男 ん？ 集合写真だね。へえ。昭和20年…。

女 この、真ん中の人…。

もうひとりの男 え…あ！

女 ね。似てませんか？

もうひとりの男 これって…。

もうひとりの男と女、男を見る。

老婆 サイタ サイタ サクラガ サイタ…。

男 やめてくれ！！ 僕に、一体何を見せようとしてるんだ！ どうして僕なんだ！

老婆を睨みつける男。

もうひとりの男　おい、キミ、この写真見てみろよ。

男　あなたもそうだ。

もうひとりの男　は？

男　いただろ！　僕の妄想の中に！

もうひとりの男　はあ？　何言ってんだ。

女　いいからちょっと見てくださいって。この真ん中の、先生…。

男　あなたもだ。

女　え。

男　これがミステリーツアーか。みんなグルなのか！　子供たちはどこだー？　どこへ行つた！

女　子供たちって…？

男　（もうひとりの男に）どうしてこの島へ来た？　（女に）どうして僕の前にチラシを落とした？　（老婆に）どうして僕に悪夢を見せるんだ？

女　悪夢って…何が見えるの、あなたに。

男　子供は…ルミは？　テルは？　アキは？　トシはどこへ行つた？　クニは？　チカは？　ユキは！　みんなどこへ消えたんだー？

女　…何を…言つてるの？　なんか怖い。

もうひとりの男　頭、やられたか？　さつきの雷で。

男　教えてくれ！　あの子たちは、どうなったんだ！

間。

老婆　消えた…みんな消えた…。

男　消えた…？

もうひとりの男　消えたって…？

老婆　あの日…グラマンが落としていった爆弾で…ぽっかり消えてしもうた…36人の…子供たちが…。

男　36人…。

もうひとりの男　ミロクか…。

老婆 ちょうど授業が始まつたばかりじゃった…。

男え…。

女（本を見ながら）監視所を狙つた爆弾が国民小学校を直撃したつて。

男 なんで…だつて、あんなに離れてるじゃないですか。監視所と、ここ。それに…あのとき、パイロットの顔だつてはつきり見えた。向こうにだつて僕たちが、子供たちが見えていたはずだ！ なんで間違えるんだ！

男、女の手から本を奪うと、必死に文字を追う。

子供たちがうつすらとその姿を現し始める。

テル グラマンは3発の爆弾を落としていった。

アキ 一発目は海に落ちて。

ユキ 大きな噴水のような水しぶきをあげた。

トシ 2発目はさつきまで遊んでいた校庭に落ちた。

チカ 舞い上がつた砂ぼこりであたりが暗くなつた。

クニ そして3発目。ぼくたちの校舎に落ちた。

ルミ 西校舎にあつた大きな掛け時計は。
子ら 10時—4分で時を止めた。

男、本を取り落す。

蝉の声に戦闘機の音が重なる。

老婆 爆弾で校舎はへしゃんこになつてしまつた。西校舎にいた子供たちは校舎ごとつぶされ、バラバラになつて。バラバラになつた体が、遠くは海までも飛ばされてなあ。穂戸の海は子供たちの血で真つ赤に色を変えたんじや。あの日ー27人の命が奪われた。亡くなつたもんの多くは、もう、誰が誰だかわからんようになつてしまつとつた。それでもみな必死に、わが子の身体を、体のほんの一部でもと、探し求めてのう。よく晴れた暑い日じやつたんじや。むせ返るような血の匂い。夏のことじやで、すぐハエも飛んでくるし、一刻も早く見つけてやらんと、ウジがわいて、腐つてしまつ。皆が必死でがれきをどかしてそばでな、野良犬が肉片を咥えて行つたりしてなあ。わしはその野良犬が憎く

て、憎くて、手当り次第に石を投げつけた。

言葉を失う3人。

雨の音だけが老婆に答えているようだ。

老婆 すっかり日が落ちて夜になつても、子供を探す親たちの声が響いてな。月明かりに照られさて、そ、らじゅうに散らばつた子供たちの教科書やら帳面やらが、風を受けてハタハタしどつた。まるで手向けの白い花のようじやつた。

雨の音。

老婆 每日毎日、島じゅう総動員で見つからん子らを探したんじゃが、どうどう36人の子供らは、そのかけらも見つけだすこともできずに終わつてしまつた。

人々、ひとりひとりと出てくる。

それは冒頭シーンの再現。

白い花と見えたそれは、爆弾によつてバラバラになつてしまつた子供たちの身体。

人（女） おおい、おばあが迎えに來たぞ、はよう出ておいで。
人（もうひとりの男） おーい、おーい。早う出てこんかー。

必死に我が子の姿を探す悲しい親たち。

人（女） ああ、この足のホクロ……うちん子じや……かわいそつに。痛かつたのう。さ、うちへ帰るう。
人（もうひとりの男） ああ……シャツに名前が書いてある……こりやうちん子じや……。

人々はやつと探し出した白い花を、大事そうにつれて帰る。

子ら 身体の一部でも見つかったものはまだ帰る家がある。

子ら けれど、どんなに探しても指一本見つからない36人の子供。

男 消えた子供たちは帰る家もなく、どこへ行ってしまったのか。

ユキ 帰りたい。うちに帰りたい。

チカ どうして私をみつけてくれないの?

クニ おとう、おかあ、迎えにきてくれよう。

アキ 惡いよう、怖いよう。迎えにきてよう。

トシ みんなどこへ行つてしまふたんじや?

テル 置いていかんしてくれよう。

ルミ こわいよう。帰りたいよう。

男 ずっとここで怯えていたのだろうか。

男、振り向く。

ルミ 先生、あそぼ。

チカ 私たち、先生がいらっしゃるのをずっと待つてました。

アキ いつまで待つても授業が始まらなくて。

クニ すごく困つきました。

ユキ 私たちずっと待つてたんです。

チカ 朝礼がなくなつて。

ルミ 教室に戻つて。

ユキ ずっと待つてたのに。

テル 先生来ないから。

アキ 男子は女子をいじめるし。

トシ 一年生は泣き出すし。

チカ ほんとに大変で。

男、再び振り返って。

男 一九四五年七月二十五日。空はどこまでも青く、空を映した海はなおいつそ、う青く、白い腹を見せて魚が跳ねていた。

女、もうひとりの男は、本を手に。

もうひとりの男 2機のグラマンは、遠井山にある陸軍監視所ではなく、海辺に立つこの小学校に2発の爆弾を落とし、女逃げ惑う子供たちに機銃掃射の雨を降らせたのでした。

照明が子供たちの姿を浮かびあがらせる。

チカ 夜になつて

トシ 我が子を探す親たちの姿を

アキ 月明かりが照らしていました

テル 子供たちの教科書やノートが

クニ 運動場いっぱいに散乱し

ルミ 風を受けてハタハタと

ユキ そのページを繰っています

テル それはまるで

トシ 月明かりに照らされた白い花が

チカ その花びらを震わせていました

子ら でも誰もわたしたちを見つけることができませんでした

ただ立ち尽くすしかない男。

男 この子たちにいったい何の罪があったのか？ どうして命を、その体ごと全部、髪一本残さず奪われねばならなかつたのか。あの日、たしかにここで輝いていたあの命を。

清らな光が子供たちを包み込んでいく。

ルミ 先生、忘れないで

男 答えなんてあるはずがない

チカ 私たちを覚えていて

男 けなげに生きた子供たちを

トシ またかけっこしようやー、先生

男 その命の輝きを

クニ 先生、今度、俺らの巣連れてつちやる

男 奪う権利が誰にあるのか

テル 先生はやさしいなあ

男 まっすぐに僕を見たあの瞳

アキ 先生、もつと遊びたかつた

男 一生僕は憶えているだろう

ユキ もつと勉強したかった

男 あの子たちを忘れる日はない

子ら 約束だよ、先生

男 僕は誓うよ

子供たちせんせー、せんせーと囁く。

いつの間にかそれはセミの声への変貌してゆく。
光の中、笑いながら消えていく子供たち。

女、本を抱きしめている。

女 空っぽの墓って、そういうことだったんですね。私、なんにも知らなかつた。何がほつとする島よ…。
もうひとりの男 知らないということは…・罪だな。

男 僕たちは知らず知らずに罪を犯してゐる…。

女 なんか、自分が恥ずかしくなつちやつた…。私、ちゃんとこの島のこと勉強しなおします。たくさんの人人が犠牲になつたこと。どこにも帰れなかつた36人の子供たちが、だけど確かにここにいたつてこと、ちゃんと人に伝えられるように。

男 あの子たちは、消えたわけじやない。あんなも確かに生きてたんだ。今もきっとここにいる。

もうひとりの男 36人…。ミロクの子供たち…だな。

男 ミロクって…未来を救うつて、言つてましたよね。

もうひとりの男 ああ。

男 未来を救う…。

もうひとりの男 36の台座はこの子たちに出会うために彫つていたのかもしれない、なんてね。

男 え…?

女 そうですよ！ きっと。子供たちはミロク様になつたんです。

男 あの子たちが、未来を救う…。

女 あなた、呼ばれたんですよ、この子たちに。

男 呼ばれた？ 僕が？

女 だつてほら、あなたこの先生にそつくり。

男 え？

女 ほら、この集合写真の真ん中の先生。

三人、本を覗き込む。

もうひとりの男 生き写しだな。
男 みんない顔してゐなあー。

女 この中におばあさんもいるのかなあ。

雨音がいつの間にか消えている。

もうひとりの男 おっ、雨が、やんだな。

女 ほんとだ。

もうひとりの男 食べに行きますか、マグロ。

女 はい。あれ、おばあさん…?

老婆はどこへ消えてしまったのだろうか。

もうひとりの男 探しに行く?

女 や、マグロで。

もうひとりの男 オーケー。キミもマグロで?

男 いや、僕はもう少しここにいます。

もうひとりの男 そう? ジヤ。

女 お先にー。あ、あとで観光課に寄ってください。

女、もうひとりの男、本を男に渡す。

男 気が向いたら。

女 必ずですよー。サボってたわけじゃないって、証言してもらわないと。

もうひとりの男 僕がしょつか?

女 いやー、ちょっと…。

もうひとりの男 ちょっと何?

女 うさんくさそつていうか…。

もうひとりの男 なにそれ。

女 待つてますから。(男に言うと出でいく)

もうひとりの男 うさんくさいって、ねえ、ちょっと!

もうひとりの男、女を追つて捌ける。

静寂。

男、机の間を歩く。

まるでそこに子供たちが座っているかのように。

男 チカ、アキ、クニ、トシ、ユキ、テル、ルミ。みんな、まだそこにいるのかい?

男の呼びかけに答えるかのびとく静かに蝉が鳴き始める。

男 ありがとうな、みんな。一人前の先生になつて、きっとまた会いに来るよ。

蝉の声が答える。

男 約束だ。

ゆづくりと茜色の夕日に輝いてゆく教室。

男 まぶしいなあ。

男、光を大きく吸い込む。

男 気をつけ! 礼! ……さようなら。……さようなら……。

男、本をそっと置くと、一度振り返ってから、教室を出てゆく。
遠くに子供の声が聞こえる。

子ら　けつこーけつこー、かけつこう。けつこー、けつこー、かけつこう。

全てが茜色に溶けてゆく。

終幕